

えないか」とギターでメロディーを爪弾いて聴かせた。大高ひさおは、彼の曲に耳を傾けたが、曲の一部にどこかで聴いた事のあるメロディーを感じた。フラットが多用されていて、ブルースの味わいがあった。戦前服部良一作曲で淡谷のり子が歌った「東京ブルース」の歌い出しにそっくりである事に大高は気づいた。

雨が降る降る アパートに 窓の娘よ なに思う

といったフレーズの部分だった。が、しっとりとした全作の雰囲気がいいので、作詞する意欲が湧いた。しかし、日本や東京舞台では「東京ブルース」のパクリだと思われる。そこで、若い頃に観たフランス映画「望郷」の映画シーンが甦(よみがえ)って来た。作詞は一気呵成に出来上がった。歌は日本人離れした顔立ちのエト邦枝に歌わせた。僅か1766枚しか売れず惨敗だった。エトも事情があり、芸能界を去る事になって自然消滅の形になった。しかし、この名曲は地下水のように、徐々に徐々に日本中に沁み渡り、田端義夫、高峰文子がカバーした。特に昭和42年(1967)緑川アコが、クラウンからカバー曲を出すとこれがヒットした。以後、竹腰ひろ子、沢たまき、扇ひろ子などがこぞってカバーした。これを受けて本家エト邦枝が表舞台に復帰して懐メロ番組で熱唱した。オリジナル盤が千数百枚だったモノが、競作を総計すると軽く百万枚を超える一大ロングセラーになったのである。

(13) 《湖愁》 歌【松島アキラ】 昭和36年

紅白歌合戦が、恒例の歳末特別番組から、芸能界最大の年中行事となったのは昭和37年の第13回あたりからである。この年、50組の出場者の内、紅組は中曽根美樹、弘田三枝子、中尾ミエ、トリオこいさんず、吉永小百合、及川千代、スリー・グレイセス、五月みどりの8組が初出場。

白組は、松島アキラ、飯田久彦、北原謙二、ダニー飯田とパラダイス・キング、デューク・エイセス、植木等の6組が初出場と大幅な交代があった。新旧交代は、3年前の第10回に兆しが出ていた。それまでの出場歌手は、音楽学校出が大半を占めていたが、この回からポップスやロカビリー出身が登場し始め

たのである。

そして、出場歌手の歌に「遊び」が現われ、植木等が「ハイ・それまでヨ」、五月みどりが「おひまなら来てね」と言ったコミカルな歌やお座敷ソングを歌うようになった。

この回の白組のトップバッターとなったのが、松島アキラだった。松島は、宮川哲夫作詞、渡久地政信作曲の「ああ、青春に花よ咲け」を歌ったが、彼にはデビュー曲でいきなり大ヒットした「湖愁」があった。

悲しい恋の なきがらは そっと流そう 泣かないで

と、淡い悲恋で終わった女性との別れを歌っていた。松島アキラは、昭和19年7月生まれだったから「湖愁」を歌ったのは、文字通りハイ・ティーンだった。この曲を作曲した渡久地政信にスカウトされ、ビクターから「湖愁」でデビューして初ヒットした。しかし、それに続く青春歌謡は「パンチカ」が乏しく、デビュー曲でヒットした歌手は大成しない「ジंकス」を地で行き、「湖愁」を越えるヒットが無いまま10数年が過ぎた。四半世紀後の平成10年に再起を期して「白い薔薇」でカンバックを試みたが、ヒットには至らなかった。



松島アキラ

給排水、衛生、空調、設備 設計、施工、設備

HSK 株式会社 北勢工業

質実剛健

代表取締役 太田 博之 (昭和56年 工業化学科卒)
専務取締役 仙北谷 聡 (平成4年 機械科卒)

秋田市仁井田本町5-1-62
TEL: 018(839)6516
FAX: 018(839)6513
<http://www.hokusei-kogyo.com>

頑張ろう! 東北
フレフレ! 秋工!

◆ 総合フードサービス事業 ◆

テンシヤル株式会社

代表取締役 大塚 廉造 (K・32卒)
相談役 大塚 洋夫 (E・35卒)

東京都中央区新川2丁目7番7号クレール八重洲ビル204
TEL(03)3297-1066 FAX(03)3297-1063